

# 伊勢湾周辺地域における 弥生大規模集落と地域社会

A Large Yayoi Settlement and the Local Community around Ise Bay

石黒立人

ISHIGURO Tatsuhito

はじめに

①集落を考えるにあたって

②大規模集落の特質

③大規模集落諸類型と地域社会

## 【論文要旨】

大規模集落には三つの類型があり、中期Ⅰ～中期Ⅲにかけて集住複合型、中期Ⅳに集住単純型、後期に分散複合型が現れる。

集住複合型は自然成長的ではなく、多数の自立的な単位が集合して、当初から大規模な集落として成立した。それは“諸生産”を可能にするためであり、朝日遺跡では生業・手工業生産も集約化されて構成単位の多数性も大小の区画により整序された。自立的な単位が占地する小区画が大区画によってまとまる重層的な構成は墓域のまとまりと調和しており、大形方形周溝墓を核とする規模格差による構造化は高い統合度を現わしている。朝日遺跡が10km圏を超えてさまざまな影響を与えた背景こそ、多種多様な系譜をもつ諸要素を統合し融合させたからであり、それも“諸生産”の一部であった。

集住単純型は人口動態の大規模変動に対応したものである。集住複合型の解体は凹線紋系土器の波及に示される《外圧》によって引き起こされたのであり、諸集団の通過や再結集、再配置への通過点が集住単純型であった。移動の継起点ではあったが、“生と死”が結び合う集落としての自己完結性に乏しいために大形掘立柱建物を軸とする象徴空間を必要とした。

分散複合型は、典型的には環濠集落群として、あるいは環濠集落と非環濠集落からなる1km圏程度のまとまりとして構成される自立的な集落の結合体であり、単体としての大規模集落ではない。中期Ⅳ以降の集団再編成の中で、集落間分業の進展と集団間の序列化の中核になった。

以上の経緯をたどって推移する大規模集落とは、離合集散を続ける集団のその時々のもとの条件に対応した現れであった。

【キーワード】 大規模集落、区画、集住複合型、集住単純型、分散複合型

## はじめに

愛知県清須市から名古屋市にまたがり、遺跡範囲が中期Ⅲ<sup>(1)</sup>には東西で約1.4kmに達するという比類なき広大（つまり大規模）な弥生遺跡である朝日遺跡が、何故、弥生前期や弥生後期ではなく、弥生中期に巨大となるのか。その疑問が、私にとっての集落研究の起点である。

しかし、数値によらず“相対的に”大規模（反対に小規模）と形容可能な集落は、実は弥生前期にも、弥生後期にもある。もとより定住集落成立以後の各時代にあるのだが、本稿では弥生時代の伊勢湾周辺地域で消長したいくつかの大規模集落を類型的に取り出し、地域社会の諸関係の中に置き直して考えてみる。

## ①……………集落を考えるにあたって

### （1）集落と景観

集落は、狭義には居住地、広義にはさらに墓地、生産地、それらの周囲を含めた景観からなるとするなら、集落論とは、居住地論と景観論を往復する議論となる。前者はこれまでの議論の主流であり、多くの蓄積がある。しかし、往時、人々が選び、そして不断に働きかけて一体化した景観をめぐって、そこに埋め込まれた思想を丹念に読み込む作業は十分に進んでいない。調査範囲や精度の問題もあり遺跡としての景観像は不鮮明なままである。

そもそも集落の範囲や集落間関係を一円（＝同心円的連続平面）的に捉えることが可能なのかという問題がある。「拠点集落」や「遺跡群」が作業概念であるとはいえ、遺跡相互の最近隣関係に基づけば当然に一円的かつ静態的となるのであり、一律ではない自然環境（それ自体も長期的には変化する）と人口配置の偏差や動態を考慮すれば、集落の範囲や集落間関係も単に距離に還元されることなく不定形なのが実態で（むしろ柔軟であるというべきか）、あえて静的であるはずの Thiessen Polygon 図作成の意義とはどこにあるのだろうか。そこに、人々の“移動”や“移住”を組み込めばなおさらである。

さて、われわれにとっての“領域区分”が果たして往時に存在し得たのかどうか。人々の日常的な往来の範囲を“領域”と言えどそれまでだが、面的に広がる耕作地も鳥瞰すれば点的な段階で、それ以外の自然の野山を含めて果たして空間が面的に把握されていたのかどうか疑わしい。漠然とした広がりの中に人々の足跡が具体的に印されて道になったとするなら、あくまで空間は線的な対象にとどまる。むしろ、線を超えて“領域区分”を志向するものが何であったのか問われよう。いっぽう、往々にして海、河川や湖沼などの海域や水域も境界と見做されるけれども、交通によって遮断ではなく結合要件となるならば、考古学的に見やすい“固定したネットワーク”から痕跡を窺うほかない“浮遊するネットワーク”まで、基点に始まる求心的かつ同心円を基礎にする関係網の変換こそが必要である。

## (2) 散居と集住

“散居”と“集住”は人類の定住形態を、遺構密度をもとに設定した分類であり時代に拘束されない。散居とは建物がまばらに点在する散在的な状態、集住とは散居に比べて建物数が多く、相互に近接する密な状態を指すが、集住がそのまま大規模ではないし、散居には大規模ではなく広範囲が相応しい。しかし、散居が固有の居住形態として弥生時代に現れるのかどうかは不確かである。環濠集落を集住の典型と考え、それとの比較で設定できるに過ぎないなら固有の範疇ではなくなるし、例えば一つの集落における集住域、散在域という区分も有り得るように、集住に比べて散居は恣意的な適用の余地を残す。

## (3) 立地の低地と高所

伊勢湾周辺地域における低地での遺跡形成は「縄文海進期」以前についてよくわかっていない。濃尾平野では、縄文中期末には朝日遺跡（標高 2.7 m）などのように、低地に点在する浅い谷沿いの、樹林も疎らで草地在卓越する微高地に再び生活の拠点が置かれたようだが、そうした場所は少ない。その後、縄文後期から縄文晩期前半までは遺跡分布も希薄なままで定住集落の成立は認められず、遺跡数が増加する晩期後半といえども一宮市馬見塚遺跡を除き内容は貧弱である。縄文晩期からの在来系遺跡の動向を土器棺墓群の展開からみれば、明らかに段丘や低丘陵に分布の重心があり、低地での（遺跡形成ではなく）居住は低調である。矢作川下流域や豊川下流域では集落が、弥生中期になってようやく低地に降りて来る。

濃尾平野や伊勢湾西岸低地では前期Ⅰに遠賀川系遺跡の形成が始まる。低地の遺跡周辺では、植生が低木と草地からなり視界も開け、対する台地上は高木が卓越して樹林が視界を遮り、四日市市市永井遺跡・大谷遺跡、名古屋市高蔵遺跡が台地縁に位置するのも低地への視界確保と海上や低地からの見通しの良さを狙ったのだろう。

中期になると低地の遺跡数が増加して、伊勢湾西岸域中部・安濃川下流域では近接して遺跡が形成される。鈴鹿川支流に面する段丘上にある東庄内B遺跡は、遺構・遺物の様相は濃尾平野に共通して低地集落圏の拡大が想定できるが、隣接する東庄内A遺跡は土器が山間部系（ハケメ紋系土器）であり、内陸圏に属す。雲出川下流域でも低地／内陸の区分を土器系統から窺え、その対関係の典型が濃尾平野と周辺部における櫛描紋系土器／櫛条痕紋系土器である。

中期Ⅳになると一転して、安濃川下流域のように段丘や低丘陵が隣接する低地では遺跡が減少し、高所立地の傾向が強まった。濃尾平野では中期Ⅳ単純の遺跡や、中期Ⅳをもって終息する遺跡があり、一宮市八王子遺跡では洪水堆積も確認されている。中期Ⅳから後期Ⅰにかけての堆積環境の変化は集落動態に大きく影響したはずである。

矢作川下流域では中期Ⅳのうちに自然堆積層を挟む遺構面の更新があり、低地における自然環境の不安定さは局所的に高所立地の要因になったと考えられるのだが、矢作川下流左岸の吉良町中根山遺跡が立地する標高 40 m の丘陵の東部には中期Ⅳの土器棺墓群が展開し、西尾市北部の低丘陵上に立地する西山遺跡や不毛遺跡の土器棺墓群とともに低地にある西尾市岡島遺跡の方形周溝墓群に対峙するかのようだ。

自然環境が安定する後期Ⅱには低地の水田化が進み、西岸域や名古屋台地周辺、矢作川や豊川流域では高所志向、濃尾平野では低地立地が継続する。後期Ⅲには伊勢湾周辺地域の全域で低地志向が復活し、矢作川中流域や雲出川下流域で遺跡が急増するが、環濠集落は高所に設けられて低地の集落に対して高所の集落となる。

以上、遺跡立地の高所と低地について一般的視点から述べてきたが、重要なのは基準設定の根拠である。水田、道、墓地、等々によってどの範囲を括るかで大きく変わってくる。例えば、平野から奥まった丘陵地帯にある津市長遺跡の場合、大形建物のある稜線を主要なルートと考えれば、建物群は「谷に展開している」となるのだが、仮に平野に面した丘陵上であれば「丘に展開している」という表現になったわけで、谷と丘では景観上の違いは大きい。段丘や丘陵など起伏地形にあって遺跡のすべてが頂部にあれば高所の範疇も無意味となる。遺跡立地については、景観的に、また地理的スケールを考慮する必要がある。

#### (4) 大形建物と集会場

大形建物の標準について、竪穴建物は床面積 100㎡以上、掘立柱建物（独立棟持柱付掘立柱式建物）は桁行 5 間（9 m）以上とすれば、前者は中期Ⅲに、後者は中期Ⅳに出現する。大形竪穴建物はほとんどが方形プランであり、円形プランはない。

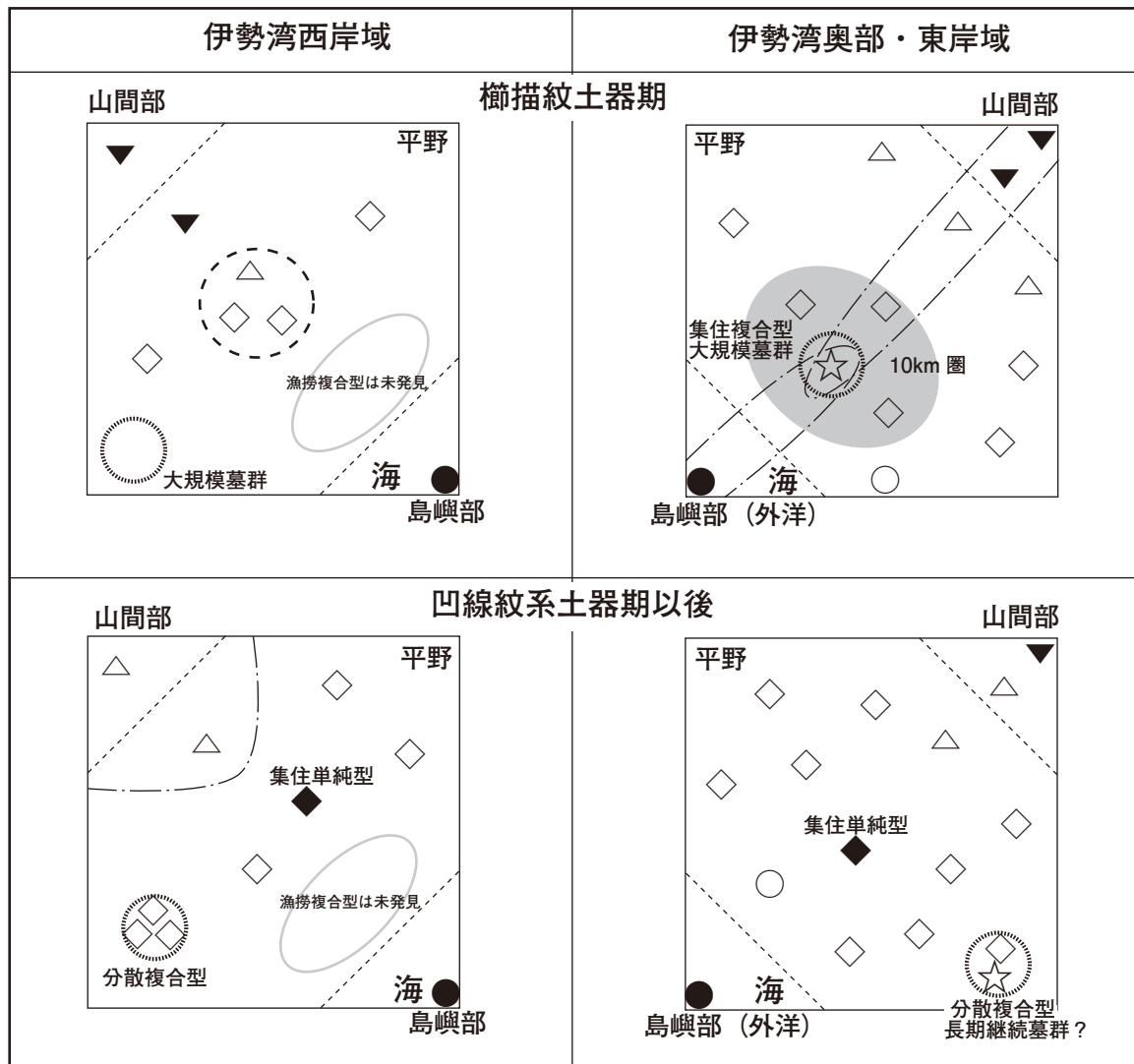
濃尾平野南部、朝日遺跡の南西約 4km に位置する甚目寺町阿弥陀寺遺跡では竪穴建物群の中央に大形竪穴建物（中期Ⅲ）が位置して、径 150 m 程の居住単位を形成している。津市長遺跡（中期Ⅳ）では大形建物が丘陵稜線上に 3 棟以上存在しているが、同時存在なのか建て替えなのかは明確ではない。稜線上の占地は、傾斜が緩く広い平坦面が確保できること、居住域を貫く幹線ルートが通っていたからであろう。

四日市市菟上遺跡では集落を南北に貫く谷の東側に独立棟持柱付掘立柱建物群が集中し、中には布掘溝を基礎にしているものがある。居住域の中核部を構成して、海上からも望めるランドマークでもあったろう。稲沢市一色青海遺跡には長軸 16 m を超える屋根倉式の大形掘立柱建物が激しい建物変遷の一段階に挟み込まれて、空間としての持続性はない。この他、朝日遺跡でも種別不詳の大形建物が井戸群を伴っている。

大形竪穴建物については竪穴建物群と単位を構成しているので通常の機能が考えられる。

大形建物や井戸など諸施設を伴って一定の空間が設けられているのは朝日遺跡だが、中期Ⅳの他の遺跡でも持続性を問わなければ類似した状況が窺える。屋外を基本にそうした場所が集会場でもあった可能性は高い。

しかし、それ以前については、居住地では広場等の存在さえ明確ではないので人々の集う場所としてはその外、例えば墓地が考えられ、朝日遺跡の大形方形周溝墓周辺はその候補となる。墓域形成の動態とあわせ、墓域内に残された空地について注意が必要である。



伊勢湾周辺地域における諸系配置モデル

- ▼ 狩猟型      △ 狩猟複合型
- 漁撈型      ○ 漁撈複合型
- ◇ 農耕型      ☆ 漁撈・狩猟混成型

## ②……………大規模集落の特質

### (1) 形態区分

#### i 集住複合型

集住複合型は、居住域が漫然と広がるのではなく、内外の明示的な区画をもって整理統合されているものである。

**朝日遺跡** 朝日遺跡は、前期Ⅰに貝殻山貝塚周辺に居住（環濠の掘削は遅れるようだ）と貝塚形成が始まり、前期Ⅱには谷Aを挟んだ北側に径100mほどの小規模な居住域を形成するが、どちら



も墓地は不明である。貝塚や貝層は貝殻山貝塚や二反地貝塚周辺地区に展開しており、中小規模の貝層は環濠内に堆積したものである可能性が高い。貝殻山貝塚地区では遠賀川系土器が主体を占めるのに対して、谷Aを挟んだ北側では条痕紋系土器が優勢で、異なる系統の土器が近接しつつも場所を違えて並存する様は、墓地が見つかっていないとはいえ後の“集落団”の予兆といえる。しかも、一方には環濠が巡り、“内と外”の区分が端的に示されている。

中期Ⅰには、谷A沿いの南北微高地を東方へと居住域が拡大していくとともに、谷A南斜面には大規模な貝層が、居住域の堅穴建物廃絶後の窪地や溝に小規模な貝層が形成された。谷A北側の弥生前期居住域は中期Ⅰbには方形周溝墓群が営まれ、その後中期Ⅰcに始まる東墓域と共に東西の基幹墓域となる。

中期Ⅰa(朝日式1a期)には環濠の掘削は不明確で、谷A斜面における貝層形成も進んでいないが、中期Ⅰb(朝日式1b期)には谷A南の区域で大溝の掘削が行われ、南斜面の大溝はその後に形成された貝層で覆われる。マガキ・ハマグリなどから構成される主鹹貝層は灰層や破砕貝層を含んで面的に堆積して、土器などの遺物はほとんど含まない。谷A北側の区域でも貝層の形成が行われ、径10m程の貝塚も形成される。ここでもほとんど人工遺物を含まず、作業場的である。これらを“貝層a類”と呼ぶ。谷A南斜面の貝層形成は中期Ⅳまで継続するが、マガキ主体は中期Ⅲで終了し、中期Ⅳにはハマグリ主体になる。

中期Ⅰcには環濠を始めとする大溝群が掘削されて、その後の集落形態を規定する。中期Ⅰbに東南部(東墓域の下層)で開始された玉作も北に拡大して工房の所在が明確となり、さらに環濠南部には工房区が別に設けられる。大形方形周溝墓を核に東墓域の形成が始まるのもこの時期である。“環濠”と推定できるのは北居住域外縁のみである。環濠南部では溝が小規模になりつつも谷Aを横断して、出入口と考えられる陸橋部付近からは「逆茂木」も見つかっている。

南居住域は谷Aに並行して2条の区画大溝が掘削され、それに直交する区画小溝も見つかっている。一部には柵列もあることから、南居住域はさらに小さく区画されていると考えられる。しかし、中期Ⅰ以後は溝の再掘削は無く、中期Ⅱにかけて埋没が進む。区画の喪失が集落全体の融合を示しているとするれば、むしろ区画の存在は異質な単位の存在を明示していたといえる。これら区画大溝の内部には土器等の廃棄物を伴う貝層(これを貝層b類とよぶ)が形成され、日常的な廃棄場所であったと考えられる。

中期Ⅲ終末には北居住域が多重環濠によって囲繞されるが、谷A内から東部の環濠帯の内側から2条目の環濠内に「逆茂木」を含む防御施設が構築される。谷A内では濠が掘削されるかわりに、柵や「逆茂木」、乱杭によって防御施設が強化された。

**安濃川下流域の遺跡群** 伊勢湾西岸域では安濃川下流域の津市納所遺跡が弥生前期以来の中核的な集落と考えられているが、前期の様相は不明な点が多い。中期Ⅰも実態は不明で遺物も前期の流路上層に掘削された溝に限定され、中期Ⅱにようやく堅穴建物の分布が認められる程度である。西約1kmに近接する中期Ⅰ単純の蔵田遺跡では掘立柱建物群のみで堅穴建物が未発見な点を考え合わせるなら、納所遺跡の中期Ⅰも掘立柱建物中心の建物構成であった可能性もある。納所遺跡の南西約1.5kmには中期Ⅰに始まる替田遺跡・式ノ坪遺跡があり、円方両形態の堅穴建物からなり、打製石器群がまとまって出土した。中期Ⅱには替田遺跡・式ノ坪遺跡と納所遺跡が併存し、納所遺

跡が河口部に位置して海への接続に都合がよく、交通上は優位にあり、重要な核であったと考えられる。

中期Ⅰ～Ⅱにかけて近接して営まれるこれらの集落について、安濃川下流域は平野の幅も3km弱と狭く、集落相互が孤立的に営まれたと考えるよりは離れていてもなお一体と看做すほうが適切であろう。蔵田遺跡の北約1kmに位置する松の木遺跡の評価（大形方形周溝墓が独自に居住地と組み合うのか、またはいずれかに帰属するのか、あるいは大形であることから全体に関連するのか）が些か気になるものの、集住することなく離散的に占地して相対的な自立性を保ったのだとすれば、朝日遺跡：集住複合型と対をなす類型（集落団）といえる。

## ii 集住単純型

集住単純型は中期Ⅳに限定され、居住域における遺構配置の空白部分の存在、あるいは建物の種類と規模から単位が推定できるものの構造を見出しにくい。概ね建物の建て替えが顕著なのに墓数は少なく、居住集団の短期的な集散を考慮する必要がある。また、遺跡範囲に限ると他の時期に比べて特に大規模といえない事例もある。遺跡の初期や末期には建物棟数が少なく、集住単純型とはいえない様相を見せる場合もあり、注意が必要である。

伊勢湾西岸域では津市長遺跡、四日市市菟上遺跡（中期Ⅳ a～c：Ⅳ a-b が中心でⅣ c は縮小、200m × 200m、90 棟以上）、濃尾平野では稲沢市一色青海遺跡（中期Ⅳ a～c：Ⅳ a-b が中心でⅣ c は縮小、400m × 200m、300 棟以上）、該期の朝日遺跡（800m × 600m）、豊田市川原遺跡（中期Ⅳ a～c：Ⅳ a-b は少なく、Ⅳ c に激増、150m × 80m、297 棟以上）が該当し、密集度は川原遺跡が最も高い。そのうち菟上遺跡、一色青海遺跡、朝日遺跡では大形建物を核とする象徴施設もしくは空間の設置によって集落としての統合性を確保している。朝日遺跡では居住地（径100m～150m）と墓地の単位が複数併存して近接した集落団を構成し、菟上遺跡と山村遺跡、長遺跡と山籠遺跡は（近接して墓域が見つかっていないので、なお確定していないが）離散的に集落団を構成した。

**一色青海遺跡** 愛知県稲沢市一色青海遺跡ではこれまでの調査によって東西400m、南北200mの範囲から200棟を超える竪穴建物や掘立柱建物が見つかった。このうち「中枢域」は長径160m、短径100mほどの範囲で、2003年には長軸が16mを超える切妻式（屋根倉形）の大形掘立柱建物とともに大形竪穴建物群の存在が確認されたが、井戸は見つかっていない。

しかし、遺構変遷を詳細に追うならば、東日本有数の規模をもつ大形掘立柱建物でさえ廃絶後に小規模な竪穴建物が重複して設けられており、空間としての排他的な継続性は無い。つまり、一色青海遺跡の居住域では建物の重複が6回以上認められるなど建て替えが激しく、それが推定300棟という建物の累積に結びついているのであって、大形掘立柱建物も激しい遺構変遷の一断面に過ぎない。墓域は狭く方形周溝墓は30基に満たない。

このように、居住域と墓域のバランスが著しく不均衡なのは、方形周溝墓の被葬者が限定されていたとみるより、“生と死”がこの遺跡では完結していなかったからだと考えられる。建て替えの激しさと裏腹に墓数が極端に少ないのも、人々の出入りの激しさを物語っていて、まさに“流通する人々”の結節点であった。

**長遺跡** 津市長遺跡は低丘陵のいくつかの頂部を含む370m × 200mの範囲に広がり、このうち

南部の一角(160m × 130m)では、やや広い丘陵頂部に加えて斜面にも地山成形と盛土によって平坦面を作り出し、屋内から外へのびる排水溝を付設する竪穴建物と小規模な掘立柱建物を110棟以上配置した。調査範囲では稜線に沿って大形竪穴建物が4棟配置されており、それに沿う幹道と平坦面に分かれる枝道の存在も窺える。

長遺跡のような立体的な集落景観は中期Ⅳ以前の伊勢湾周辺地域にはなく、まさに突然出現した。こうした全く新しい居住デザインの出自は当然のごとく外部(西日本)に求めざるを得ないのだが、集落内部に目を向ければ埋石炉をもつ竪穴建物も複数あって、居住者が西方からの“外来者”のみではないことも明らかである。集落形態の規定要因を投下労働量でみれば段状の地山整形は無視できないが、居住デザインの細部には外来起源もあれば在地起源もある。中期Ⅳにはそうした多系性が集落に結集しており、その背景に人々の移動性の高揚、ひいては移住の活発化があるのだろう。

例えば排水溝の分布を見ると、長遺跡では付設率が112棟中25棟で22.3%、全周がわかるもの29棟中25棟で86.2%と高率である。それに対して、菟上遺跡では88棟中6棟の6.8%、全周のわかるもの36棟中でも16.7%であり、四日市市上野遺跡になると排水溝の痕跡も無く、鈴鹿川以北では排水溝付設率は低い。

### iii 分散複合型

分散複合型は、“集落団”を核にしてさらに周辺と線的な関係をもつ、通常の意味での原子論的な集落ではない。平野部のような平坦地で複数の集落(環濠集落)が隣接して併存する事例、谷で開析された台地縁や低丘陵の一定の範囲に環濠集落を含みつつ内容を異にする集落が近接する事例が該当する。濃尾平野では朝日遺跡の環濠集落群、伊勢湾西岸域では四日市市・朝明川下流左岸や鈴鹿市・鈴鹿川下流左岸の遺跡群、愛知県・名古屋台地の遺跡群、安城市・矢作川中流域の古井遺跡群が該当する。

古井遺跡群は遺跡の密集度が高く、同時期の景観復元については今後の詳細な分析を経る必要があるが、あえてモデル的に言えば、本神遺跡・東上条遺跡のような台地縁(高所)に位置する環濠集落と低地の集落群という、景観的な高低差を階層差に置き換え得る余地がある。豊田市高橋遺跡(低)／南山畑遺跡(高)、四日市市西ヶ広遺跡(低)／金塚遺跡(高)も同類型である。この点は居館論議にも関わる。

分散複合型は「居住地と墓地の結合単位」である集落の結合体としてどのような形がありえるのか、という視点で識別したものである。この点では「遺跡群」概念に最も深く関わる。ただ、集落相互の関係の強度が距離に単純に反映されないから、流通・交易、墓葬、儀礼等々からの接近が必要になる。

## (2) 生業の様相

弥生時代の集落は、水田稲作農耕を生業の基本の一つとすれば、“農耕型”がまずあり、縄文時代以来の生業から“漁撈型”“狩猟型”が理念型として想定できる。しかしその同定は難しく、漁撈が組み合う“漁撈複合型”、狩猟が組み合う“狩猟複合型”、両者をあわせもつ“漁撈・狩猟混成型”に区分するのが实际的である。それぞれの指標は、漁撈複合型：骨角製漁具・魚網錘(貝層)、狩猟複合型：石鏃・スクレーパー(そして使用痕のある剥片類)、そして漁撈・狩猟混成型は総て



を併せ持ち、骨角製漁具の自家生産が特徴である。

漁撈複合型について、貝層のみが伴う場合については、臨海部における採集活動の一環であり、取り立てて技術的な制限があるわけではない。海上移動が必要な潜水漁撈によるアワビを含む岩礁底性貝種の採集でなければ、老若幼男女総てにわたって可能であり、採貝期が農繁期に重なるといえども同様である。生態的知識、操船や道具の用法に関わる身体技法、道具の製作技術等々の習得や熟練が必要な漁撈活動とは区別すべきである。

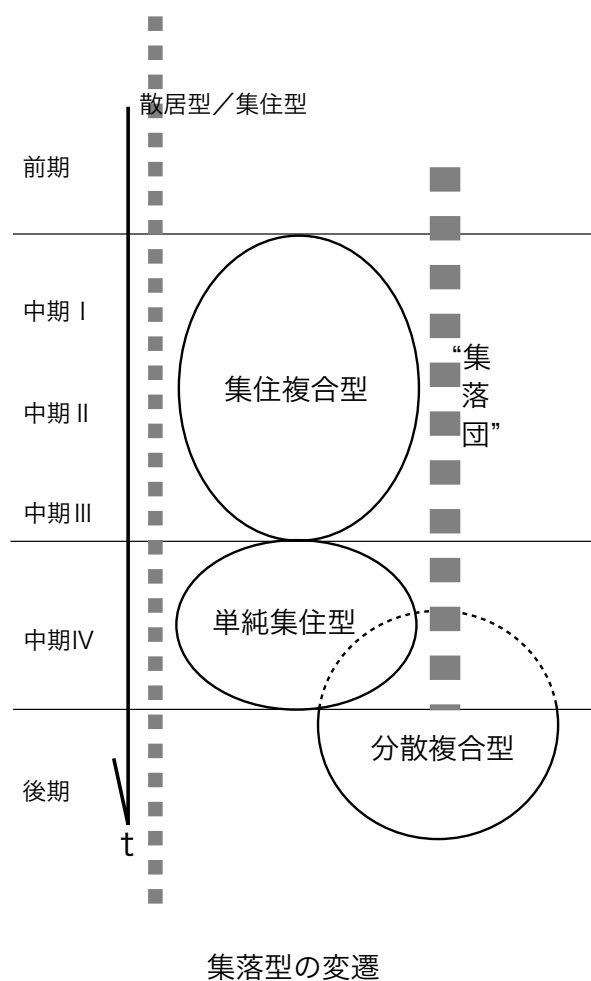
漁撈複合型はさらに「汽水・淡水系」と「汽水・鹹水系」に区分できる。後者は縄文時代以来の銚やヤスなどの刺突具や釣針を主要漁具とする伊勢湾内での沿岸漁撈や外洋での漁撈活動が基本であるが、活動域が外洋か湾内かは居住拠点からの移動距離に関わる。しかし、漁具に関して言えば、集団漁である網漁が低調な一方で刺突具や釣針による個人漁が優勢な状況が、伊勢湾口の島嶼部や三河湾はもとより伊勢湾奥部の朝日遺跡でも認められる点に注意が必要である。

伊勢湾周辺、とりわけ三河湾において刺突漁・釣漁は、縄文晩期には網漁との併用であり、その中で知多半島先に浮かぶ篠島に所在する神明社貝塚では釣漁や刺突漁が優勢であった点が注目されたように、弥生時代において個人漁が専業化への方向性をより強めたのならば、朝日遺跡への漁撈者の収斂も考える必要がある。朝日遺跡では、骨角製漁具は貝層内からの出土例が当然のこと多いのだが、谷Aにより近い南居住域北部には固定銚が出土した土坑（中期Ⅲに属す）もあり居住域内での漁具の保有は明らかである。

他方、「汽水・淡水系」は弥生時代に普及する「農村型漁撈」に一致する。朝日遺跡では確かに出土魚骨の分析結果からその事実が確認されている。だが、水田域を活用する以前にも河川・沼沢における淡水漁撈があったわけで、水田環境をことさら過大評価することはできない。それは、内水面が自然の湿地帯から人造の湿地帯（乾湿が人為的にコントロールされていたとはいえ）に変わったに過ぎないからである。むしろ、弥生時代になると伊勢湾周辺地域では、網を用いる集団漁の実態が「汽水・淡水系」「汽水・鹹水系」とともに不明確になる点と集団漁による中小の雑魚の捕獲よりは刺突漁や釣漁による大物獲りを含む「汽水・鹹水系」漁撈が存在した点を対比的に考える必要がある。動物系の副食や弥生時代の市場交換をどのように考えるのかといったこともあるが、後者について一般的な消費を対象にしたものではなく特別な貢納物であったと考える余地はある。

狩猟複合型について、石鏃と削器の組み合わせを重視すると、伊勢湾西岸域では該当する遺跡数が極端に少ないが、濃尾平野では弥生前期には基本形のようにも見える。弥生中期には朝日遺跡、八王子遺跡、猫島遺跡など主要な遺跡では認められる一方で濃尾平野南部の中小規模遺跡では不明である。北部域では門間沼遺跡が該当し、粗製剥片石器もまとまって出土しており、弥生前期に共通している。

弥生時代の生業、それは単なる食糧獲得にとどまらず、人々の生存をめぐる諸活動がどのようなものでいかに編成されていたのか、基本的には自然環境とのバランスをとりながら社会的・経済的環境がどのように作用していたのかが考えられなければならない。端的には“技術”の時空的意味ということになるだろうが、集落においてはそれを担った組織がいかなるものであったのかが問われる。この点では集住複合型において狩猟・漁撈は緊密に結び合ったといえようが、その後の展開において名古屋市瑞穂遺跡や小坂井町欠山遺跡を見る限りは、むしろ分散複合型にあって核となる集落に



付随して存続している印象が強く、集落形態には現れていない。

### (3) 手工業生産の様相

朝日遺跡では100 m四方の広がりをもつ小区画が認められており、磨製石斧などの必需財は製品・未製品ともにこうした区画に相当するかのような濃淡をもって（もちろん累積ではあるのだが）分布しているので、木製土木具・農耕具などの必需財生産は個別に行なわれていた可能性が高い。換言すれば、小区画は通常集落に相当する規模の自立的な小単位であり、生産活動は均質であった。

そこに重なったのが玉作である。朝日遺跡の玉作には銅鐸鑄造？の影もつきまとうのだが、玉作関係遺物の分布を見れば複数箇所に分散して生産が行われたことは明らかで、工房区存在もそうした集団を明示して受容する体制が準備できていたことを示している。つまり、生活に密着する必需財であろうが社会的に付加価値をもつ財で

あろうが、自立的な、あるいは独立した生産単位を受容できる体制が整えられていたのが集住複合型であった。狩猟・漁撈を含めて汎用ではない各種道具類の生産も集住複合型に組み込まれたのは結果ではなく、前提であった。

中期Ⅳには諸集落の均質化と併せて機能分化も進み、春日井市勝川遺跡のような木器生産への特化も生じた。こうした流れは集住複合型に集約されていた“諸生産”の地域的な再編成によって生まれたのであり、それを石斧から鉄斧へという基本的な生産具の転換が後押しした。集住単純型に示される人的資源の流動化、つまり人々の広範な移動もその方向を強めた。資源や諸技術の集中による生産はすでに不可能になり、極をもたない物流が重要となった、その延長に分散複合型の役割がある。鈴鹿川下流左岸段丘上の後期遺跡群では水晶製玉作を行っていた可能性があり、これなどは鉄製工具の保有を前提として生産物の遠隔地への配布が大きな枠組みの中で行なわれたことを示す。

さて、中期Ⅳまでは生活や生業活動に必要な必需財関連の手工業生産も素材や半製品の物流に依存しており、完結した自家生産は不可能であった。必需財の素材は生業内容や保有する生産技術に対応して集落（集団）ごとに配分され、半製品や製品は生産活動の量に応じて配布されて集中することは無い。必需財の偏在は集落（集団）の存続にとって死活問題となるからであり、均等化への

圧力が働いたであろう。それに対して各種の玉や金属器などは偏在や集中が生じ、紡錘車についても遺跡の規模に関わらず出土するとはいえ、量的に集中する遺跡があり、繊維素材の入手を含めて一貫した自家生産であったのかどうか疑わしい。おそらく上質の布に関しては付加価値があったものと考えられる。これら、付加価値財をめぐる交易について、弥生後期には鉄も絡んでくる。

弥生後期の交易は鉄器を軸に進む。鉄器は、道具としては石器の代替物であり必需財に属すが、素材・製品、製作・修繕技術の外来性と汎用性によって付加価値を付与されて交易の主役に座ったと考えられる。それが必需財を軸に形成された地域の経済面を不安定にさせた。

地域を超える財の交換である交易の継続には交通の保証が不可欠だが、弥生時代に阻害する状況は認められない。環濠集落にしても、それらが社会的な軋轢を直接に表示したものか明確ではない。かえって環濠集落の叢生期である弥生後期に諸要素の組織化が進み三遠式銅鐸に象徴される“伊勢湾様式”の成立に至ることは、相互の緊密化が増したことを示している。その過程で軋轢が生じたとしても、社会を分断するのではなく、統合に向けて作用したと考えられる。石から鉄への必需財の転換は、地域に依存した従来の価値体系を不安定、もしくは崩壊させ、一方でより遠隔地交易への依存を高めた。そのことが経済的諸関係の再編成を引き起こし社会変動の要因になったのなら、その支点となったのが分散複合型であろう。

弥生後期には特定のエリアで交易網の収束が生じた。矢作川中流右岸域の安城市古井遺跡群では北陸系土器や近畿系土器、関東系土器の在地生産が行なわれ、おそらく人々の移住によって技術の移植が行なわれた。また、交易を掌握する上で漁撈集団が果たした役割も無視できない。内陸河川はともかく、海上交通の活動線が分散複合型に結びつく様は漁具や貝輪によって朝日遺跡や瑞穂遺跡、欠山遺跡でも窺えるので、たとえ痕跡的に過ぎないとしても丁寧に扱う必要がある。

### ③……………大規模集落諸類型と地域社会

朝日遺跡が中期Ⅰの短期間に多数の異質な単位が集合して集住複合型へ成長したのは、灌漑型水田稲作にとどまらない“諸生産”を可能にするためであった。稲作生産だけなら用排水が未整備な段階では可耕地ごとに集落が分散すればよいのであって、大規模に集住する必要は無い。縄文晩期以来の、あるいは径が100 mを超えない弥生前期の環濠集落程度の集住規模で十分であろう。

しかし、朝日遺跡では大小の区画施設によって複数の単位が配置され、統合された。小区画それぞれは通常の集落に相当する機能をもつ均質な生産単位であったが、墓域にみるように大形方形周溝墓を核に規模格差によって整序され、組織的にも統合された。中期Ⅰから中期Ⅱにかけて区画施設が消失するのは、系譜の異なる大小多様な集団の統合が順調に進んだからである。朝日遺跡に特有な漁具生産の一貫性も沿岸漁撈に関わる生業集団と狩猟に関わる生業集団との連繫により実現された。そのような多系統の共存から融合に向かう過程で貝田町式土器や朝日型長身鏃など、固有の表象がうみだされ、周辺に受容された。

ところが、朝日遺跡は凹線紋系土器の波及に示される《外圧》によって一旦崩壊し、人々の広範な移動を引き起こして社会の流動化を招いた。直後の再編過程に集住単純型が成立し、その分布の時期的変化は再編の空間移動を示す。集住単純型はいったん解き放たれた諸集団の再結集への通過

点として、まさに移動の継起点であり、“生と死”が結び合う集落としての自己完結性は低い。だからこそ大形掘立柱建物を軸とする象徴空間が必要であった。

集住単純型とはある意味で容器としての集落であり、内容は絶えず入れ替わっていた。形式を支えたのが象徴空間であり、内容を支えたのが不断の移動であった。そのうちのいくつかは自立性ゆえに集落が隣接したまま“集落団”という集落配置をとった。それが中期Ⅳから後期Ⅰの自然環境の変化によって分解して後に一旦落ち着いたとき、分散複合型として現れた。

現象的には自立的な集落の群集に過ぎない分散複合型は、地域の核となりつつ周辺域と有機的関係を形成した。分散複合型と周辺集落との関係は同心円的な距離関係に反映されず、水系や地理的単位に拠りつつも不定形であり、むしろ人々の往還路が関係の基礎となり、中期Ⅳ以降、移動と移住が常態化していたであろう。

分散複合型は遠近にわたる活発な交通を取り結び、後期Ⅱにおける生活世界から精神世界にわたる「伊勢湾様式」ともいえる文化的共通性の確立に寄与した。基盤としての緊密な諸関係を担ったのが平野部や海岸・島嶼部における水（海）上活動民、そして内陸山間部の活動民であり、それらが鉄器交易や三遠式銅鐸の連鎖を支えた。遠隔地に及ぶその活動の一端は土器や有孔磨製石鏃から窺うことができる。後期Ⅱ後半以降に分布を始める「黥面線刻」や「弧帯（組帯）紋」はその延長にある。

## 註

(1)——時期区分は次の通りである。前期Ⅰ（馬見塚式終末・檜王式、遠賀川系土器前半）、前期Ⅱ（水神平式、遠賀川系土器後半）、中期Ⅰ（朝日式・岩滑式）、中期Ⅱ（貝田町式1期・岡島式・瓜郷式1期）、中期Ⅲ（貝田町式2期・瓜郷式2期）、中期Ⅳ（Ⅳa：凹線紋系1期・古井式1期、Ⅳb：凹線紋系2期・古井式2期、Ⅳc：凹線紋系3期・高蔵式・長床式）、後期Ⅰ（八王子古宮式・見晴台式）、後期Ⅱ（小谷赤坂式・山中式・寄道式）、後期Ⅲ（廻間式1期・欠山式）。

## 参考文献

- 三重県教育委員会 1973 『東名阪自動車関係発掘調査報告』。  
三重県教育委員会 1980 『納所遺跡発掘調査報告 遺構・遺物』。  
三重県埋蔵文化財センター 1999 『蔵田遺跡発掘調査報告』。  
三重県埋蔵文化財センター 2000 『長遺跡発掘調査報告』。  
三重県埋蔵文化財センター 2002 『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』。  
三重県埋蔵文化財センター 2004 『替田遺跡（第4次）発掘調査報告』。  
三重県埋蔵文化財センター 2006 『菟上遺跡調査報告』。  
愛知県埋蔵文化財センター 1991 『岡島遺跡』。  
愛知県埋蔵文化財センター 1993 『岡島遺跡Ⅱ』。  
愛知県埋蔵文化財センター 1995 『朝日遺跡Ⅴ』。  
愛知県埋蔵文化財センター 1996 『川原遺跡』。  
愛知県埋蔵文化財センター 2008 『一色青海遺跡Ⅱ』。  
名古屋市教育局委員会 2004 『朝日遺跡発掘調査報告書（第14次・第15次・第16次）』。  
西尾市教育局委員会 1986 『西山古墳発掘調査報告書』。  
吉良町教育委員会 1989 『中根山遺跡』。  
赤塚次郎 1993 「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム』3、愛知考古学談話会、1-32頁。

- 
- 石黒立人 2006「弥生集落の景観構造をめぐる試論」『古代文化』VOL.58, 財団法人古代学協会, 106-118 頁。
- 伊藤禎樹 1984「朝日遺跡の漁撈具をめぐって」『マージナル』No.3, 愛知考古学談話会, 1-6 頁。
- 川添和暁 2001「「棒状鹿角製品」小考」『研究紀要』第2号, 愛知県埋蔵文化財センター, 1-12 頁。
- 木之本和之 2003「三重県の環濠集落」『研究紀要 弥生時代小特集・伊賀国府跡（第6次）』第13号, 三重県埋蔵文化財センター, 6-17 頁。
- 設楽博己 1999「黥面土偶から黥面線刻へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集, 国立歴史民俗博物館, 185-202 頁。
- 鈴木とよ江 1999「西三河地方における弥生集落の動向について」『松崎八反田遺跡・熊子山遺跡』西尾市教育委員会, 45-50 頁。
- 鈴木敏則 2005「第9章第3節 有力集落の変遷」『梶子遺跡X』, 財団法人浜松市文化協会, 58-69 頁。
- 竹内英昭 2003「渦中のクニ」『研究紀要 弥生時代小特集・伊賀国府跡（第6次）』第13号, 三重県埋蔵文化財センター, 18-29 頁。
- 樋上 昇 2000「東海系曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』no.12, 考古学フォーラム, 1-27 頁。
- 山崎 健・宮腰健司「朝日遺跡出土の魚類依存体」『研究紀要』第6号, 愛知県埋蔵文化財センター, 34-45 頁。

(愛知県埋蔵文化財センター, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理, 2008年12月5日審査終了)



## **A large Yayoi Settlement and the Local Community around Ise Bay**

ISHIGURO Tatsuhito

There are three types of large-scale Yayoi settlements: 1) compound-type settlements that existed from Middle I through Middle III; 2) the simple clusters of dwellings of Middle IV; and 3) scattered compound-type settlements in Late Yayoi.

Compound-type settlements did not develop naturally, but were large settlements from the outset that were formed by the coming together of many independent units. This was to enable “various production.” At the Asahi Site, the many units that were production collectives producing daily necessities and handcrafts were also organized in blocks of varying sizes. Large blocks with a stratified structure formed by bringing together independent units occupying small blocks are consistent with the organization of burial precincts. Structuring using differences in scale centered on large rectangular tomb mounds surrounded by a ditch is a manifestation of strong integration. It is precisely due to the various influences on the Asahi Site covering more than 10 kilometers that elements with a wide variety of genealogies were integrated, and this too was part of its “various production.”

Simple clusters of dwellings came about in response to massive changes in population dynamics. The demise of compound-type settlements was brought about by “outside pressure” as indicated by the spread of combed-pattern pottery, and these simple clusters of dwellings were a point of transition for the passage, regrouping and relocation of various groups. Although they were sites of successive migration, because they were not self-contained settlements where “life and death” took place, they required symbolic spaces centered on buildings with large earthfast posts.

Scattered compound-type settlements were typically moated settlements or a combination of independent settlements made up of a group of moated and non-moated settlements covering an area of around one kilometer. On their own they were not large settlements. When groups were being restructured after Middle IV, they formed the nucleus of advances in the division of labor between settlements and the creation of a hierarchy among groups.

Large settlements, which changed in the ways described above, responded to the intermittent and inherent conditions of groups which continued to assemble and disperse.

Key words : large-scale settlement, boundary division ground, complexly collective housing type, simply collective housing type, decentralized compound type

---